

高校国語科において多面的・多角的思考力を育む 「問い」とその授業の在り方

—国際バカロレアのTOK（知の理論）を用いた評論文指導から—

M18EP013

森 陸史

1. 問題

高校国語科の授業改善が求められている。その背景には大きく三点ある。

第一に高大接続改革による大学入学共通テストの導入（2020年度実施予定）がある。「知識の理解の質を問う問題や、思考力、判断力、表現力を発揮して解くことが求められる問題を重視して出題」（大学入試センター，2017）とあり、知識だけではない、国語科の資質・能力を問おうとする姿勢が認められる。

第二に新学習指導要領（2018年3月告示，2022年施行）が挙げられる。学びの三要素として「知識、技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」が取り上げられている。学び方として主体的・対話的で深い学びの実現も必要だ。

第三にグローバル社会で求められている資質・能力の育成が挙げられる。中でも国際バカロレア（IB:International Baccalaureate）は「我が国では、「日本再興戦略-JAPAN is BACK-」（平成25年6月閣議決定）に基づき、国内における国際バカロレア認定校等（ディプロマプログラム）を2018年までに200校に大幅に増加させることを目標としている」（文部科学省，2014）とあり、山梨の県立高校でも導入が検討されている。IBの目標とする学習者像は「探求する人、知識のある人、考える人、コミュニケーションが出来る人、信念を持つ人、心を開く人、思いやりのある人、挑戦する人、バランスの取れた人、振り返りができる人」（IBO，2015）となっており、全人的な教育を施すプログラムとなっている。本研究ではその教育プログラムを授業改善の方略の一つとして位置づける。

これらの背景に共通する課題としては「思

考力」が挙げられる。知識偏重の授業からの脱却が迫られ、表現・判断等の土台となる思考力の育成が求められているのである。以上により本研究では、国語科の授業改善、とりわけ生徒に身につけさせる資質・能力としての「思考力」を育む授業の実現を目的とする。

2. 方法

(1)大学入学共通テストのプレテスト(平成29年11月実施)参加高校生徒へのアンケート

育成すべき思考力の焦点化を図る目的で、山梨県で平成29年11月実施のプレテスト（国語）を受験した山梨県立A高校3年生262名にアンケートを実施した。全5項目、回答に要する時間は10分程度のものである。

(2)思考力を育成する「問い」を含めた授業の開発・実践

(1)により焦点化された「思考力」を育むための授業を開発・実践した。授業改善の視点として、国際バカロレアの授業科目の一つであるTOK（Theory of Knowledge，知の理論）の考え方を取り入れた。授業実践は山梨大学教職大学院の授業科目、実習I（課題発見実習）で今年度筆者が実習を行った、山梨県立B高校（SGH指定校）探究科1年2クラスに対して、1コマ55分の授業をそれぞれ4コマずつ、実践した。

3. 結果・考察

(1)アンケート結果より

(1)プレテスト（国語）は難しかったですか？
(有効回答全262人)

①難しかった	61人 (23.3%)
②やや難しかった	123人 (46.9%)
③どちらでもない	69人 (26.3%)
④やや簡単だった	5人 (1.9%)
⑤簡単だった	4人 (1.5%)

全体の70%以上が難しかった・やや難しかったと答えている。高校の教育現場として対応の必要性があるのは間違いない。

(2)プレテスト(国語)は100分でした。解答時間としてどう感じましたか?

(有効回答全 262 人)

- | | |
|-----------|---------------|
| ①長かった | 12 人 (4.6%) |
| ②やや長かった | 24 人 (9.2%) |
| ③長くも短くもない | 155 人 (59.2%) |
| ④やや短かった | 61 人 (23.3%) |
| ⑤短かった | 10 人 (3.8%) |

全体の70%以上が①②③、つまり「解答時間は足りていた」を選択していた。難しく感じた理由は問題量・分量ではないことが考えられる。

(3)プレテスト(国語)の第1問は3問あり、全て記述式でした。全体的にどうでしたか?

(有効回答全 261 人)

- | | |
|----------|---------------|
| ①難しかった | 43 人 (16.5%) |
| ②やや難しかった | 125 人 (47.9%) |
| ③どちらでもない | 65 人 (24.9%) |
| ④やや簡単だった | 20 人 (7.7%) |
| ⑤簡単だった | 8 人 (3.1%) |

全体の約65%が難しかった・やや難しかったと答えていた。マーク式問題はもちろんだが、第1問(記述式問題)に対応する必要がある。

(4)(3)で①難しかった②やや難しかったと答えた方にお聞きします。テストのどのような点から、そのように感じましたか?

(記述式, 有効回答全 142 人)

- | | |
|---------------------|------|
| A.記述式問題の形式に関する記述 | 62 人 |
| B.文章・資料の読み取りに関する記述 | 26 人 |
| C.解答のまとめ方に関する記述 | 26 人 |
| D.思考に関する記述 | 21 人 |
| E.その他(もう覚えていない, など) | 7 人 |

やはり、記述式問題の形式そのものを理由に挙げる記述が多かった。記述式問題への苦手を解消させる必要がある。

この記述回答の中で筆者が特に注目したの

がB,C,Dである。これらの記述を分析し、生徒に育成させるべき思考力ははたして何なのか、検討した。

Bの記述では、「情報が読み取りにくかった・資料の読み取りが難しい・多くの情報から必要な部分を取り出すこと・資料のどこの部分を使えばよいか悩んだ・読み取るところが限られていなくて大変・複数の資料から情報を読み取る点・資料の大事なところをピンポイントで読み取るところ」などが挙げられ、答えるべき情報を様々な角度から捉える力の育成が必要なように考えられる。

またCでは「解答をまとめるのが難しかった・指定された字数で全ての要素を入れて書くこと・情報を整理するのが大変・ただ書き抜くだけでは解くことができない・カギとなる文はなんとなくわかったが、それをまとめる方法が分からなかった・要点をまとめるのが難しかった」などの記述があり、答えるべき解答が様々な側面を持つ情報の集合体であることを認識し、それをまとめる力の必要性が考えられる。

Dでは「考えることが多く大変・自分で解答を作ることが難しかった・推測して書かなければならない・自分の考えを書くのが難しい・思考力が問われていた・今までの知識のみで解けるものではなく、自分の考えを持ち、自分の言葉で表現しなければならない」という記述がみられた。生徒も思考力の必要性を感じていることが考えられる。

(5)(3)で③どちらでもない④やや簡単だった⑤簡単だったと答えた方にお聞きします。テストのどのような点から、そのように感じましたか? (記述式, 有効回答全 67 人)

「実生活により近い体験の内容のもので考えやすかった」という内容の回答が多数あった。イメージしやすい状況に対して取り組みやすさを感じている反面、イメージしにくい状況の問題には対応できない可能性も示唆された。こういった場面にも対応できる

「本当の思考力」の育成が必要であろう。

アンケート全体を通じて、「多面的・多角的思考力」の育成の必要性が示唆された。新学習指導要領の中学社会の解説編に、「多面的・多角的に考察」するとは、学習対象としている社会的事象自体が様々な側面をもつ「多面性」と、社会的事象を様々な角度から捉える「多角性」とを踏まえて考察することを意味している。」(文部科学省, 2017) とある。今回のプレテストの記述問題で言えば、この「社会的事象」を「答えるべき解答」と置き換えて考えることができるだろう。答えるべき解答の「多面性」と「多角性」とを踏まえて考えることで、正答を導き出すことができるはずだ。

(2) 授業開発・実践

教科書国語総合改訂版現代文編(大修館書店)から「言葉についての新しい認識(池上嘉彦)」を教材とし、全四時間の単元構成とした。一時間ごと実践を追っていきたい。

①一時間目 評論文「言葉についての新しい認識」についての読解

まず生徒に学習プリント①(図1)を配布し、「言葉とはどのようなものであるとあなたは考えるか。根拠とともに80~120文字(句読点含む)で記せ」という課題に取り組みさせた。プリントは授業前と授業後に全く同じ課題に取り組めるものとした。目的は二つあり、記述の変容から、生徒の思考力の育成を教師が評価するためと、その変容を生徒自身が振り返られるようにするためである。また、80~120文字としたのは大学入学共通テストの記述問題の文字数を意識した。解答欄もプレテストの記述問題に合わせたものとした。生徒に120文字という記述問題に慣れさせるためである。また120字以内に「まとめる力」も意識した。

生徒のほとんどは予想通り、「言葉は伝達の手段・コミュニケーションツール」とし、評論文「言葉についての新しい認識」でいうと

ころの「これまでの言語観」で書いていた。実際の学習プリントは次の通りである。言葉を「手段」という一面で捉えている。

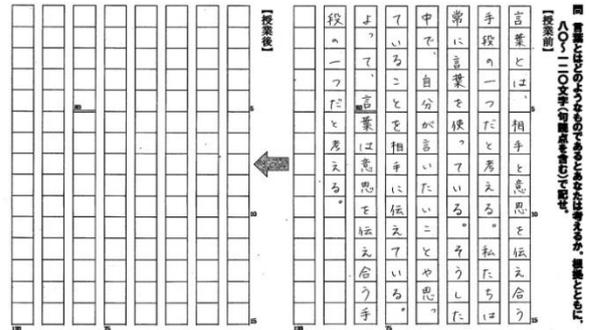


図1 学習プリント①

次に教科書本文を生徒に黙読させ、内容を把握すべく、構成・主題を書き込む学習プリント②(図2)に取り組みさせた。これまでの授業観察から、生徒の実態として、この本文程度の内容・分量なら、個人で取り組めると考えた。生徒は集中して課題に臨んでいた。

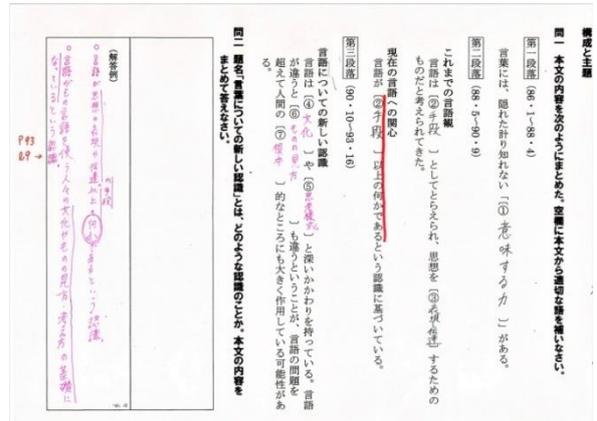


図2 学習プリント②

答え合わせの後、テレビ番組「チョコちゃんに叱られる(NHK)」の「なぜ虹は7色？」を録画したものを視聴した。この番組では「虹が七色なのはレミファソラシドレだから」とし、アイザック・ニュートンが、当時権威のあった学問「音楽」の音階と結びつけて虹を七色と定義したと紹介していた。これを利用し、連続した対象に節目を入れ、分割する「分節化」という考え方を生徒に伝えた。合わせて、言語について考える際に用いられることが多いことも紹介し、虹の色数が言語によっ

て異なるように、私たちは、切れ目のない混沌とした対象（世界）を言語によって分節化することで、秩序あるものとして認識していることを伝えた。

授業の最後に次時の活動内容を予告した。本文の主題である「言語が、思想の表現や伝達の手段以上の何かであるという認識」を、我々はどのように知るのか、様々な角度から考えてみたいことを伝えた。

②二時間目 TOK（知の理論）の説明・

言葉の持つ力についてグループで考える①

二時間目と三時間目は図書館で授業を行った。豊富な資料（インターネットにつながるPC 4台含む）があるのと、環境として机の大きさ・配置などが学習活動に適していたからである。机は六人掛けの机が八台あったので、1班5人×8班で学習するのにちょうどよかった。班の構成は、2クラスとも、男子16人女子24人の40人であったので、男子2人女子3人の班とした。

冒頭、学習プリント③を配布し本時の活動を生徒に伝えた。【「言語は、単なる表現、伝達の手段以上の何かである」ということを、どのように知るのか？（何がそのような考えを信じさせたのか？）】という学習課題である。そして、その課題に取り組む観点としてIBのTOK（知の理論）における「知るための方法」を紹介した。教科書本文の「このようなことは、自分が生まれ育った母語という一つの体系の中に安住している限りは、なかなか気がつかない。」という記述から、日本とは別の教育プログラムであるIBを知ることでまた深い思考ができるようになるかもしれない、ということも生徒に伝えた。

ここでTOKについて紹介しておきたい。TOKとはIBのディプロマプログラム（DP: Diploma Program）における科目の一つである。DPのコア科目とされ、どの教科にも関わるものとされている。その指導の手引きの中で「あなたはどのようにして知るのか」

（How do you know?）という問いに対する答えを生徒がさまざまな文脈において考え、この問いの価値を認識するよう促すこと」

（IBO, 2015）というねらいが示されている。日本においては、平成27年8月19日文部科学省告示第一二七号の「国際バカロレア・ディプロマ・プログラム認定校における教育課程の規準の特例」の中で、セオリー・オブ・ナレッジを日本の学習指導要領における総合的な学習の時間に読み替えてよい（文部科学省, 2015）としている。IBOが発行する「指導の手引き」や「教師用資料」に基づく参考書も多いことから、「教科書のある総学」という認識で良いだろう。

今回はその参考書の一つである「国際バカロレア（IB）スキルと実践 知の理論」（Sara Santrampurwalaほか4名, 2015）を引用し、生徒用資料（図3）を作成した。

「知の理論」は、本資料で取り扱っている内容は、通常は授業活動の中で取り扱われるべきものであり、上記キーワードをキーワードとして、内容は変更して、自由に活用していただくことを推奨します。

項目	内容
目次	1. 知の理論の概要 2. 知の理論の目的 3. 知の理論の重要性 4. 知の理論の学習方法 5. 知の理論の評価方法
1. 知の理論の概要	知の理論とは、知の獲得と伝達の方法を考察する学問である。知の獲得と伝達の方法は、知の獲得と伝達の方法を考察する学問である。
2. 知の理論の目的	知の理論の目的は、知の獲得と伝達の方法を考察することである。知の獲得と伝達の方法を考察することである。
3. 知の理論の重要性	知の理論の重要性は、知の獲得と伝達の方法を考察することである。知の獲得と伝達の方法を考察することである。
4. 知の理論の学習方法	知の理論の学習方法は、知の獲得と伝達の方法を考察することである。知の獲得と伝達の方法を考察することである。
5. 知の理論の評価方法	知の理論の評価方法は、知の獲得と伝達の方法を考察することである。知の獲得と伝達の方法を考察することである。

参考文献
Sara Santrampurwala ほか4名 (2015)
国際バカロレア (IB) スキルと実践 知の理論
オックスフォード大学出版局

図3 TOK「知るための方法」資料

TOKでは「知るための方法」として、8つの観点を挙げている。それは感情・記憶・知覚・想像・理性・直観・信仰・言語の8つである。生徒にこれらをすぐに理解することは困難だと考え、教師側で考え方の例を示した。前時で学習した虹を題材とし、それぞれ虹を7色だと「知る」方法であることを示した。「感情」なら虹は七色であってほしい、「記憶」なら虹は七色だとしてきた、「信仰」なら虹は縁起の良い数字である7色のはずだなど、例を示した。

また、チョークを引き合いに出し、「これが

チョークだということをどのように知ったのか」という問いかけを生徒に示した。目という視覚で見た事実、学校という空間で白い棒状の物は何かという記憶や感情、それらを理性的に考えた結果、チョークという言語で認識したはずである、ということを生徒に伝えた。その後、でもひょっとしたら千歳飴かもしれない、ということを生徒に伝えた。

ある程度理解が進んだところで、生徒にどの方法で取り組むか、考えさせた。8班あるので「知るための方法」の中からそれぞれ一つずつ選ばせた。

授業の後半は生徒の活動である。【「言語は、単なる表現、伝達的手段以上の何かである」ということを、どのように知るか？（何がそのような考えを信じさせたのか？）】という課題に対して、各班にそれぞれ決まった「知るための方法」を用いて、話し合うように指示した。図書館にある資料はPCを含め、利用してよいことにした。A3のホワイトボードを各班に配布し、使用させた。

すぐにPCなどに飛びつくかと思われたが、実際には生徒たちはそれぞれの班員の中でかなり話し込んでいた。「知るための方法」を彼らなりに理解するのに苦しんでいたようで、「直観と直感は違うのかな」「信仰ってどういうことだ？」「これは（感情ではなくて）記憶になっちゃうか」などと話し込んでいた。そこで教師の方から、知るための方法はあくまでも切り口で、それ自体についてはあまり深く考えなくてよいこと、課題に対して相性の良い方法も悪い方法もあるであろうこと、それぞれの方法が重なる部分も当然あること、などを伝えた。しかし「難しい」「わからない」「（先生の）意図はどういうことなのだろう」というような消極的な発言が生徒に多く出る時間となった。

③三時間目

言葉の持つ力についてグループで考える②

二時間目に生徒が感じた困難さをふまえ、

授業の始めに、取り組む学習課題を整理した。

【「言語は、単なる表現、伝達的手段以上の何かである」ということを、どのように知るか？（何がそのような考えを信じさせたのか？）】という学習課題であるが、「知る」という日本語では「物事について、情報を得たり知識を持ったりする」(明鏡国語辞典第二版)という意味合いの方が生徒にとって強いのではないかと考えた。その意味合いで「知る」を捉えてしまうと、「情報・知識」を「知っているか知らないか」の二択になってしまい、答えとしての「情報・知識」は何なのか、という思考に陥ってしまう。そうではなく、「認識する」という意味合いで思考してほしいと考え、英語で学習課題を示した。

【How do you know? あなたは、〇〇だということを、どのようにして知るか？】

【What made you believe such an idea? 何があなたにそのような考えを信じさせたのですか？】

の二つである。特に二つ目の「what~」の方が生徒にとってわかりやすいのではないかと考え、「今、君たちに聞いているのは、そして考えてほしいのは、このwhatの部分とsuch an ideaの部分なんだ」ということを生徒に伝えた。そしてsuch an ideaの方は、教科書本文の二つの主題、広義である「言語が、思想の表現や伝達的手段以上の何かである」という認識、狭義である「言語が、その言語を使う人々の文化や、ものの見方・考え方の基礎になっている」という認識のどちらでも良いこと、そして前者の広義の方で考えた場合、「手段以上の何か」ではなく「手段以外の何か」で考えても良いことなどを伝えた。

Whatの方を明らかにすることがメインであることも忘れずに伝えた。そしてその切り口としてTOKの「知るための方法」を用いてほしいことを伝えた。

生徒たちは図書資料やインターネットを活用するなど、前時以上に活発に取り組んでい

た。他の班の考えを参考にしている場面なども見られた。二時間目もそうであったが、新学習指導要領の「学びに向かう力,人間性等」の評価で考えれば間違いなく満点の生徒たちであった。普段の指導の結果であろうし、SGHの活動をしている、という自負もあるのかもしれない。筆者もそれをふまえ、自分たちなりのideaを出すことを恐れないでほしいこと、この課題のいわゆる「答え」などなく、言い換えればそれを「正解」にするものもないのも自分たち次第であることなどを伝え、自信を持って四時間目のプレゼンテーションに臨んでほしいことを伝えた。図4はグループで作成したプレゼン用の資料(ホワイトボード)である。それぞれの班が自分たちなりのideaを出していた。

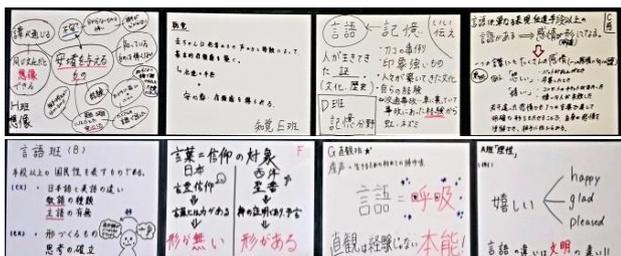


図4 プレゼン用資料

④四時間目

言葉の持つ力について、グループ発表

四時間目はそれぞれの発表である。まず学習プリントを配布し、本日の流れを確認した。

①プレゼンテーション

【「言語は、単なる表現、伝達の手段以上の何かである」ということをどのように知るか？(何がそのような考えを信じさせたのか?)】

- ・1グループ3～4分×8グループ
- ・班全員で発表、一人一回以上は発言
- ・早く終わった場合は質問する場合あり
- ・聴衆は発表の聞き取りメモを取る

②学習プリント①【授業後】に取り組む

【「言葉とはどのようなものであるとあなたは考えるか。根拠とともに、80～120文字(句読点を含む)で記せ。】

- ・10分程度の予定

とした。また、プレゼンテーション、記述課題ともに共通の評価基準を示した。

「5:言葉についての非常に優れた認識と例証が見られる」「4:言葉についての優れた認識と例証が見られる」「3:言葉についての十分な認識と例証が見られる」「2:言葉についての認識と例証がいくらか見られる」「1:言葉についての認識と例証が限定的に見られる」「0:上記に示す基準に達していない」このような評価基準とした。

また、前時に準備したグループのプレゼンテーション用資料(ホワイトボード)は印刷し、個々に配布した。聞き取りをメモすることに集中しすぎることを避けるためである。

生徒たちの発表は、前時から本時までの少ない時間の中でかなりの準備をしてきたことが考えられるものであった。その一つ、知るための方法を「信仰」で考えたグループの発表を紹介したい(表1)。

表1 信仰グループの発表

<p>生徒A 私たちは、言葉というものは手段以上の信仰の対象であると考えました。なぜ信仰の対象であるかという、人間にはもともと原罪意識というものがあります。原罪というのは原っぱに罪と書いて原罪です。原罪というのは人間にはどうしようもできない罪のことで、そういった原罪の罪の罰として自分たち人間は死んでしまう、そういう考えがあり、そういうことで信じるものが必要なので宗教を始めました。その宗教というのは言葉によって作られて言葉によって始まっています。そして、その言葉は、その神すらも作っているのです。</p>	<p>生徒B 西洋の宗教においては聖書やコーランを含めた預言書を信じております。つまり人々は預言書に関わる神という存在を証明する言葉そのものを信じていると言えます。</p>	<p>生徒C 一方、日本の信仰には言霊信仰というものがあります。例えば死ぬという言葉は、発すると本当に起こってしまう、と言われており、現在でも死の言い換えは多くあります。例えば亡くなる、隠れる、逝く、逝去などがあります。また、念仏を唱えることも言葉を信じることを象徴していま</p>
---	--	---

ダイス法の提案

①多面性のある事象を「問い」とする

物事は一面的ではない。ほとんどすべての事象が多面性のあるものであろう。社会的事象でも、科学的事象でも構わない。オープンな問いの方が良いとは思いますが、小学校などの発達段階によってはクローズされた問いでも構わない。知識構成型ジグソー法では「3つか4つの知識を部品として組み合わせることで解けるもの」(東京大学 CoREF, 2009)という「問い」を設定する、としているが、ダイス法では「面」が重要である。多面的に捉え得る、様々な側面を持っている事象を対象とすることが必須である。恐らく高校の国語教科書に取り上げられている評論文の主題の多くは、これに該当するのではないだろうか。

今回の授業実践ではそれが「言葉」であることはいうまでもない。

②その「問い」について多角的に考えさせる

その多面性のある事象の「面」を捉えさせるために、「角度」を生徒に与える。個人でもグループでも構わない。教室の人数、実態に合わせてよい。その角度から「面」を作る。

ここでいう「角度」とは、先に挙げた知識構成型ジグソー法でいうところの「部品」では決してない。部品から構成されるのは一面にしか過ぎないからだ。角度とはすなわち、立場、条件、前提、地位、身分、役職、視点、観点、姿勢、スタンスなどと呼ばれるものである。そのそれぞれの角度からそれぞれの面を創り上げていく過程で必要な部品(資料など)の提示方法については、生徒の実態を踏まえ、教師側で留意する必要があるだろう。

今回の授業実践ではTOKの「知るための方法」がこの「角度」にあたり、面を創り出すのに必要な資料については、図書館の資料から生徒に探させた。

③それぞれの「角度」から考えた「面」を共有する

発表形式でも、ワールド・カフェやギャラ

リー・トークのような形式でもよい。それぞれの角度から個人、あるいはグループが捉えた「面」を全体で共有する。

今回の授業実践では発表形式とした。同じような内容の発表が続く授業は退屈だが、ダイス法ではそれぞれ違った角度から考えているので発表形式でも生徒は集中できるだろう。

④多面的に捉える

共有されたそれぞれの「面」を合わせて、物事を多面的に捉える。これも個人でもグループでも構わないだろう。事象を多面的に捉えられるようになると良い。

今回の授業実践ではここが課題として残った。生徒に「多面」を落とし込む時間を作ることができなかった。そのため、最後の「言葉をどのようなものと考えるか」という記述課題をそれぞれの班で考えた一面で記述する生徒が多かった。まず「一面」で書かせ、さらに「多面」で書かせるなどの工夫が必要だ。

以上、①～④をダイス法の基本としたい。それぞれのセクションでの細かい部分は、各教師の創意工夫が求められる。

引用文献

- 大学入試センター (2017) 平成29年11月に実施する大学入学共通テスト導入に向けた試行調査(プレテスト)の趣旨について
北原保雄編 (2010) 明鏡国語辞典第2版 大修館書店
- 国際バカロレア機構(IBO) (2015) 「知の理論」 TOK 指導の手引き
文部科学省 (2014) 我が国における取組等 http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/1352960.htm 2018.6.25
文部科学省 (2015) 国際バカロレアの導入を促進するための教育課程の特例措置
文部科学省 (2017) 中学校学習指導要領 解説 社会編
- Sara Santrampurwala ほか4名 (2015) 国際バカロレア(IB) スキルと実践 知の理論 オックスフォード大学出版局
東京大学 CoREF (2009) 知識構成型ジグソー法 <http://coref.u-tokyo.ac.jp/archives/5515> 2018.12.22